OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	1950年から1965年までの吉村順三の著作にみる伝統論について
Author(s)	羽藤, 広輔
Citation	デザイン理論. 2019, 74, p. 67-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75318
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

1950 年から 1965 年までの吉村順三の著作にみる伝統論について

羽 藤 広 輔

キーワード
吉村順三，伝統論，伝統論争，書院造，民家
Junzo Yoshimura，Theory of tradition，Dispute about Tradition，Shoin style，Folk dwellings

1. 研究の背景と課題設定
2. 既往論考について
3. 1950–1965 年の吉村順三の伝統論
4. 結　論

1. 研究の背景と課題設定

前稿[1]でも触れたように，1950 年代伝統論争の総括のされ方には，不十分な点がある。和風建築批判の実態やその反論について，あまり触れられて来なかったのは，その一例と言えよう。本稿で取り上げる吉村順三（1908–1997）ついても，当時，ニューヨーク近代美術館からの依頼を受け，その中庭に展示する書院造の建築の設計・現場監理を行い（写真 1／この作品について，以下「ニューヨークに建つ書院造」と表記する），高い評価を受けた一方で，古典建築をそのまま再現する計画のあり方について批判もあった。しかしながら，吉村自身が 1950 年代当時，どのような伝統論を展開していたのかについて，詳細な研究は報告されていない。

また 1950 年代は，吉村の活動全体を考える上でも重要な時期と言える。なぜなら，吉村は 1950 年代に入る頃，独立後の設計活動を本格化させ，その後 1963 年に代表作「軽井沢の山荘」（写真 2）を発表していることから，同時期は，吉村がその作家性を確立していった期間と考えられるからである。

一方，1965 年の「建築と設計　私はなぜ新宮殿の設計から手を引くか」（1965.7.11／表 1–19）は，吉村自身の伝統理解が体系的に説明された文章であり，本研究にとって重要な資料と言える。

よって本稿では，1950 年から 1965 年までの吉村の著作（エッセー，対談記事，作品説明

本稿は，第 60 回大会（2018 年 8 月 8 日，同志社大学）での発表にもとづく。

文）を対象資料とし，これを網羅的に調査することにより，同時期における吉村の伝統論の展開を明らかにする。その際，伝統論争が活発化するきっかけとなった，丹下健三の「現在日本において近代建築をいかに理解するか ── 伝統の創造のために」[2]（1955.1）や池辺陽の「「日本的デザイン」といかに取りくむか」[3]（1955.2）が発表された 1955 年初頭を 1 つの時期的境目と捉えながら，研究を進めるものとする。なお，第 3 章の表 2〜4 における引用文中の下線及び丸番号は全て筆者によるものである。

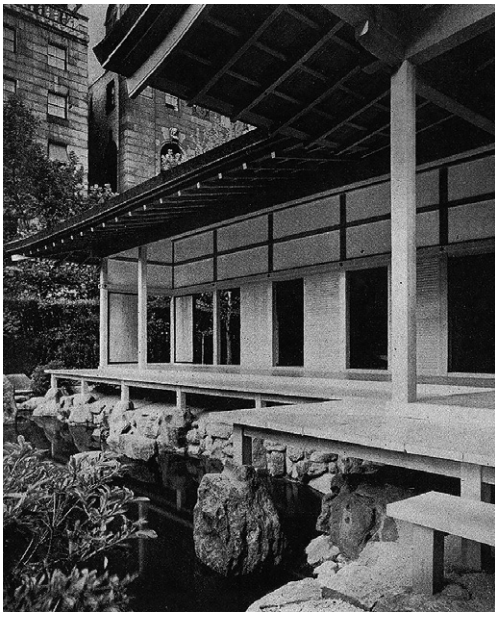

写真 1　ニューヨークに建つ書院造
（『新建築』1954 年 12 月号）

写真 2　軽井沢の山荘（『建築』1963 年 12 月号）

2. 既往論考について

2.1. 1950 年代伝統論争

1950 年代伝統論争は，主に川添登（1926–2015）が編集長を務めた『新建築』誌上において，丹下健三などの建築家達が，伝統と創造の問題についてそれぞれの主張を展開したものある。

藤岡洋保によれば，その背景に，「社会主義美学の登場，海外からの日本建築への関心，急激な伝統排斥への反動など」が挙げられるとし，「1930 年代のモダニズム的伝統理解が基礎になったが，ほかに，①「民衆」の視座への共感，②「空間」による伝統の把握，③「縄文的なもの」への関心，が登場した」という。②については「寝殿造を例に，「空間の無限定性」が日本の伝統として抽出された」としている。一方，1930 年代においては，「帝冠様式」に反対したモダニズムの建築家たちが「①平面と構造の簡素・明快さ，②素材の美の尊重，③無装飾，④左右非相称，⑤環境との調和，⑥規格の存在，を継承すべき要素に挙げた」として，当時の伝統理解を説明している [4]。

2.2.「ニューヨークに建つ書院造」に関する当時の評論

同建築は，1954 年に，日本住宅の実物展示のため，ニューヨーク近代美術館の中庭に建てられた木造平屋の和風建築であり，光浄院客殿の構成に近い。設計を吉村，工事を伊藤平左衛門，考証を関野克が担当した [5]。

この作品が発表された『新建築』（1954.12）誌上には芦原義信が評論を寄せており，「高度の職人の技術を要する日本の木造建築がたとえ素晴らしい味をもつているとしても，それをそのまま，アメリカに導入することは考えられない。むしろその中にあるふんいきとか近代性をアメリカの工業水準におきかえる方法で，これを参考にする方法が考えられる。このような意味からして時代の下つたくずれたものよりもこのような書院道と山水が日本建築文化紹介の任務をになつたことは機宜に適したものであつたといえよう」[6] とする等，好意的に捉えられる一方，古典建築をそのまま再現する設計のあり方について批判もあった。『新建築』1955 年 2 月号の池辺陽による論考がそれであり，「創造と模倣とはその区別をなくしてしまつた。（中略）近代建築家の長い間闘つてきたものは，このような様式の枠からの解放でなかつたか」とし，仮にだれかが本格的なゴシック建築を日本に紹介するためにその設計を「ル・コルビュジェに依嘱したとする。彼が引き受けるだろうか，そんなことは有り得ないことで自明のことである」と厳しく批判している。さらに，このことが不思議と思われないで見過ごされていることについて「その原因は日本の古典建築のもつ近代的性格と，日本社会に真の近代建築の基盤が確立していないこと，の両者にある」と指摘している。同論考の後半で，池辺は自身の立場を示しており，「日本の民衆の生活様式の動向」について，「それは生産と結びついた動的なものであり，西欧民主主義によつて確立された個人の問題である。そしてそれらの原始的形態を，日本の農家などに感ずる」としている [7]。

2.3. 吉村に関する既往論考

1950 年代の伝統論争との関連から，吉村を扱った研究論文で，学会誌に掲載されたものはほとんど見られない。報告されている研究としては，その設計手法に関するものが多数を占めている。また，その背景となる建築観に関する研究としては，「環境」等の語に着目した研究が報告されている [8] が，伝統論に着目したものはいまだ報告されていない。

1950 年代の伝統論争に関連して吉村の活動に着目した研究としては，「ニューヨークに建つ書院造」を取り上げた藤岡洋保による 2 つ論考があるので確認しておこう。

まず 1997 年の論考 [9] では，同作品について「吉村の建築観が全面的に展開されており，MoMA の意向や，機能，敷地条件に配慮しつつ，伝統表現をテーマにまとめたもので，古建築の単なる写しではなく，知的な作品と評価できる」としている。文中，「MoMA の意向」

としているのは，「現代における有効性を重視」した方針を指している。論考の中で，藤岡は，光浄院との違いにうかがえる吉村の設計方針として a）平面，b）細部の省略，c）木割を挙げており，a）において，「茶室・便所・風呂場・台所が付加されている。伊藤平左エ門博士によれば，これは住宅として機能しうる形で展示したいという吉村の意向によるという」としている。また松風荘（「ニューヨークに建つ書院造」の建物名称）に見られる伝統理解として注目される点について，「書院造を日本建築の代表とする考え方である。昭和初期には桂離宮など数寄屋風の意匠が注目されることが多く，書院造を正統とするのは新しい見方だったと考えられる。そこには 1935 年頃からの住宅史研究，それも特に関野研究室による書院造や木割の研究成果が反映していると考えられる」としている。これは吉村の伝統論そのものとは言えないが，協働者たちの考え方に影響を受けた可能性はある。

また，2004 年の論考 [10] では，論旨に大きな変化はないものの，より詳細な見解が示された。光浄院との重要な違いとして，上段の省略を挙げ，次のように説明している。「それは動線の確保のためということもさることながら，主室と庭との連続性をできるだけ高めるためと見るべきだろう。このことは床を庭と正対するように置いたことにも示されている。広々とした広縁を介して庭と主室が連続するという開放的な空間構成こそが，吉村にとって光浄院で最も評価すべき，また現代にも示唆を与えると考えられる特徴だったと思われる」としている。また，1997 年の論考の c）に該当する「寸法」について，「高さ関係の寸法は松風荘の方がやや低めに設定されている。このあたりには数寄屋造り的な美意識がうかがえる」とし，「松風荘のモデルは書院造りではあるが，それをコントロールする美学には数寄屋造りも織り込まれているのである」と指摘している。

この書院造と数寄屋造の問題について，香山壽夫は 2005 年の論考 [11] で，別の角度から論じている。そこでは，香山自身が吉村から直接聞いたとする「日本建築を勉強するのなら，数寄屋から入っちゃいけません。まず書院を勉強することです。」という言葉によりながら，吉村を肯定的な意味で「古典主義者」と位置づけている。その理由として，吉村の建築が「自立した形式」を持っているからだとし，「自立した形式とは，どのような形式細部を用いるかとは関係なく，常に単純な基本要素とその構成によって生み出される多様性を特徴とする。したがって，それは時代の流行に左右されることなく，自立し得る。「数寄屋から入らず，書院から学べ」とは，その姿勢から自ずと出てきた言葉なのである」としている。

その他，吉村の活動に対する評論について，主要なものを確認しておこう。内容は，やはり住宅の設計に注目したものが目立つ。

横山正は，「レーモンドの系統をひく吉村はこのような戦後の展開のなかでほとんど発言をせず，静かに住宅をつくってきたが，そこで表現された内容ははからずも大正から戦前のさ

まざまな時代，戦後の模索と，日本の住宅が辿ってきた足跡の集約点となっている。彼の住宅に見るさまざまな表現には数寄屋的なものの味わいと日本が欧米の住宅に学んだものとが融かし合わされており，それはまたプランニングの方法にもひとしくあらわれている。すなわちそこには藤井厚二につながる数寄屋を通しての革新の方法と，レーモンドの建築に見る西欧的な思考法とが理想的な形で結合しているのが見られるのである」[12]（1976）としている。

また，藤森照信（1992）は「思想らしい思想は最後までついてこなかった可能性だってないではない。吉村は建築のあり方について聞かれると「気持ちがいい」とか「とても素直」とかまるで禅の老師のような返答しかしてくれないから，迷える建築青年たちは空をつかむようで，ますます迷ってしまう。吉村がまちがいなく建築についてもっているのは，“思想”ではなく“想い”なのだろう。」とし，吉村が中学時代から購読していた『住宅』誌の編者であり，住宅作家であった山本拙郎からの影響を指摘し，吉村のコンペ入賞案への山本の講評によりつつ，「何とも言えず素直」という表現を吉村の特性に重ねている[13]。

さらに，田中禎彦（1998）は，「軽井沢の山荘」（1962）について「民家のもつ素材や構成の美を活かした」[14]と触れている。

3. 1950–1965 年の吉村順三の伝統論

3.1. 言説の抽出と分析の方法

1950 年から 1965 年までの吉村によって発表された建築作品記事やエッセー，対談記事は，表 1 に示す通り，全部で 75 件あった。その内，エッセーが 5 件で，対談記事が 6 件であり，残りの 64 件は，すべて建築作品の発表記事であった。また，64 件の作品発表の内，吉村本人の説明文が付されたものは，8 件のみであった。よって，合計 19 件の資料を対象とし，吉村の伝統に関する言説の抽出と分析を行う。抽出した言説は，全て次節以降の表 2〜4 に示している。

また分析は，2-1 に示す藤岡の総括を規準に行うものとする。すなわち，1930 年代に形成された伝統理解の特徴として，平面と構造の簡素・明快さ（30-a），素材の美の尊重（30-b），無装飾（30-c），左右非相称（30-d），環境（自然）[15]との調和（30-e），規格の存在（30-f）の 6 項目，1950 年代に形成された伝統理解の特徴として，「民衆」の視座への共感（50-a），「空間」による伝統の把握（50-b），「縄文的なもの」への関心（50-c）の 3 項目を規準とし，吉村の伝統に関する言説を意味内容ごとに分類する。また，藤岡の総括に見られない内容は，吉村独自の言説と位置付ける。以上の方法をもって，吉村による伝統論の展開の特徴を読み取る。引用文該当箇所の下線に付された丸番号は，その言説を特定するための記号であり，分類結果を示す表 5 と対応させている。

表 1　1950–1965 年の吉村の著作リスト

No.	年	月	誌名	発行	記事タイトル	種別	吉村の文章
—	1950	5	新建築	新建築社	W氏邸	作	×(?)
—	1951	1	新建築	新建築社	パテオのある住宅	作	×(?)
—	1951	1	建築文化	彰国社	日本的な洋風小住宅	作	×(?)
1	1951	2	国際建築	美術出版社	アントニン・レーモンド	エ	◎
—	1951	8	新建築	新建築社	永井邸—眉山居—	作	×(?)
2	1952	2	みずえ	日本美術出版	新日本感覚の展示会	エ	◎
3	1952	10	建設情報	建設情報社	最近の問題作を語る	対	◎
—	1953	8	新建築	新建築社	伊勢正義氏のアトリエ	作	×(?)
—	1953	10	新建築	新建築社	東山君の家	作	×(?)
—	1953	10	新建築	新建築社	M紡績工場	作	×(?)
—	1954	1	新建築	新建築社	A氏邸	作	×(編)
—	1954	1	新建築	新建築社	ニューヨークに建つ書院造	作	×(編)
—	1954	1	建築文化	彰国社	有富邸	作	△(?)
4	1954	1	国際建築	美術出版社	有富氏邸	作	◎
5	1954	1	国際建築	美術出版社	ニューヨーク近代美術館に展示する日本の家	作	◎
—	1954	1	日本の現代建築	彰国社	有富邸	作	×(?)
—	1954	6	国際建築	美術出版社	ビル売店2題	—	×(なし)
6	1954	11	国際建築	美術出版社	欧米の近代建築と各国の伝統	対	◎
—	1954	12	新建築	新建築社	ニューヨークの近代美術館に展示された書院造	—	×(なし)
—	1955	1	新建築	新建築社	丹下論文		
—	1955	2	新建築	新建築社	池辺論文		
—	1955	5	新建築	新建築社	園田高弘氏の家	作	×(K)
—	1955	7	新建築	新建築社	国際文化会館	作	×(?)
—	1955	8	国際建築	美術出版社	国際文化会館	作	△(?)
—	1956	1	新建築	新建築社	国際文化会館内に建つ住宅	—	×(なし)
7	1956	3	新建築	新建築社	伝統をどう克服するか	対	◎
—	1957	5	新建築	新建築社	共立蒲原病院	作	×(編)
—	1957	8	新建築	新建築社	海の家—東京銀行葉山臨海寮	作	×(編)
8	1958	2	新建築	新建築社	山の上に建つモーテル	作	◎
9	1958	3	国際建築	美術出版社	山のモーテル	作	◎
10	1958	3	国際建築	美術出版社	伊豆山に建つモーテル計画案	作	◎
11	1958	3	国際建築	美術出版社	ロックフェラーセンターの日本航空事務所	作	◎
12	1958	3	国際建築	美術出版社	東京銀行葉山臨海寮	作	◎
—	1958	7	新建築	新建築社	P.S.コンクリートの家	作	×(?)
—	1958	7	新建築	新建築社	M氏邸	作	×(編)
—	1958	9	新建築	新建築社	千駄ヶ谷の家	—	×(なし)
13	1958	11	新建築	新建築社	「明日の小住宅」にもとめるもの	対	◎
—	1959	1	新建築	新建築社	C.M.氏邸	作	△(?)
—	1959	1	新建築	新建築社	高島屋 NEW YORK 店	作	△(?)
—	1959	5	新建築	新建築社	荻窪の家	作	△(牧野)
—	1959	6	木工界	工作社	上野凰月堂	作	×(?)
14	1959	6	婦人画報	婦人画報社	日本的な美しさとは	対	◎
—	1959	7	新建築	新建築社	弥永邸	作	△(牧野)
—	1959	7	商店建築	商店建築社	上野凰月堂	—	×(なし)
—	1959	9	近代建築	近代建築社	高台のK氏邸	作	△(牧野)
—	1959	10	新建築	新建築社	50坪の木造住宅(自邸)	作	△(牧野)
—	1959	12	新建築	新建築社	ホテル小涌園	作	△(?)
—	1959	—	世界建築全集14	平凡社	遠山邸	—	×(なし)
15	1960	2・3	国立公園	国立公園研究会	ホテルと旅館	エ	◎
—	1960	4	新建築	新建築社	K氏邸	作	△(牧野)
—	1960	5	新建築	新建築社	上野凰月堂	—	×(なし)
—	1960	8	建築文化	彰国社	ヒレル邸	作	△(?)
—	1960	4	木工界	工作社	コンクリートのなかの和風	作	△(上田悦三)
—	1960	8	木工界	工作社	画家の家	作	×(編)
—	1960	12	新建築	新建築社	河庄	作	△(牧野)
16	1961	10	新建築	新建築社	誠実な建築	エ	◎
—	1962	1	建築文化	彰国社	ソニー株式会社研究所	作	△(牧野清)
—	1962	2	新建築	新建築社	京都国際ホテル	作	×(編)
—	1962	3	建築文化	彰国社	京都国際ホテル	—	×(なし)
—	1962	8	新建築	新建築社	小倉カントリークラブハウス	作	×(編)
—	1962	38	モダンリビング	婦人画報社	Nさんの軽井沢山荘	作	×(?)
—	1963	1	新建築	新建築社	NCRビルディング	作	×(?)
—	1963	2	新建築	新建築社	新宮殿の基本設計まとまる	作	×(?)
—	1963	2	ジャパン・インテリア	ビスタ	NCRビルディング	作	×(編)
—	1963	5	新建築	新建築社	同志社大学アーモスト館	作	×(編)
—	1963	5	新建築	新建築社	ダムと建築との結びつき—畑薙第一ダム	作	△(奥村昭雄)
17	1963	8	近代建築	近代建築社	建築創造のるつぼ	対	◎
—	1963	9	建築	中外出版	NCRビル	作	×(不ニサッシ)
—	1963	10	新建築	新建築社	S邸	作	△(奥村まこと)
—	1963	10	新建築	新建築社	Nさんの軽井沢山荘	作	×(編)
—	1963	12	建築	中外出版	森の中の家	—	×(なし)
—	1964	—	現代の住まい	講談社	S邸	作	×(?)
18	1964	1	新建築	新建築社	新宮殿の設計について	作	◎
—	1965	2	SD	鹿島出版会	東京クラブ	—	×(なし)
—	1965	3	近代建築	近代建築社	北野アームス	作	×(?)
—	1965	7	新建築	新建築社	八幡野の週末住宅	作	×(編)
19	1965	7	朝日ジャーナル	朝日新聞社	建築と設計　私はなぜ新宮殿の設計から手を引くか	エ	◎

エ:エッセー、対:対談記事、作:作品説明文
◎:吉村の文章、△:吉村以外の設計者の文章、×:設計者の文章なし、()内:筆者

3.2.　1950 年代前半の吉村の伝統論

1950 年代前半の吉村の伝統に関する言説について，表 2 の通り抽出した。1950 年代初頭，まず吉村は，レーモンド[16]と吉田五十八に関して，それぞれエッセーを執筆している。次の「最近の問題作を語る」（1952.10／表 1–3）では，伝統に関する言及は見られなかった。住宅作品「有富氏邸」は，『新建築』，『国際建築』，『建築文化』，『日本の現代建築』等で発表され，『国際建築』で吉村による説明文が付された。「ニューヨークに建つ書院造」（1954.1）は，前述の通り，1950 年代の伝統論争との関連で見ると，最も注目されるプロジェクトであり，その後論争を引き起こした。『国際建築』1954 年 11 月号では，同様に海外において和風建築に取り組んでいた建築家，すなわち，「サンパウロ日本館」（1955）の設計を行った堀口捨己と

同建築の現場監理を担当した大江宏との間で行われた対談記事が掲載された。その中で，堀口が「サンパウロ日本館」について「ニーマイヤーの飛躍した近代性のマスにどうして対抗するか」を考えていたとしたのに対し，吉村の発言（引用文 5）があった。

表 2　1950 年代前半に見られた吉村の伝統に関する言説

	引用文
引用文 1 （表 1–1）	「自分は大切なことを皆古い日本の建築から学んだのだ」というレーモンド氏の作品の中には，構造の明快な表現①や，優れた材料の処理②や，生活と建築の均衡③と云う様な，日本の建築の特性が完くフレッシュな姿で生かされている。 （「アントニン・レーモンド」『国際建築』1951.2）
引用文 2 （表 1–2）	吉田さんのデザインは材料は日本建築から出発しているが，その結果は反って西洋的な豪華さが特徴の様な気がする。今度は吉田さんにもっと我々の生活程度に合い，これならば誰でも採り入れられると思う様なデザイン①を考えて頂き度いと思う。（「新日本感覚の展示会」『みずゑ』1952.2）
引用文 3 （表 1–4）	食堂の南の深い屋根の上が，四季を通して快い場所になっている。日本の気候には深い軒の出が非常に大切①なことだと思われる。 （「有富氏邸」『国際建築』1954.1）
引用文 4 （表 1–5）	建物と庭との関係はこの計画の最も重要な要素①と考えられるので，狭いながらもできるだけよい庭を造りたいと思っている。主庭は石組を主とした砂庭を考えていたが，実際には池を掘り，広縁と池水のコントラストによってダイナミックな雰囲気を出したいと思っている。 （「ニューヨークに建つ書院造」『国際建築』1954.1）
引用文 5 （表 1–6）	材料を生かした骨組の力感①や，全体と細部のプロポーション②，建築のつくり出す雰囲気③ ── いいかえれば，土地と建物の結びつきから生れる強さ④で太刀打ちができると思います。 （対談「欧米の近代建築と各国の伝統」『国際建築』1954.11）

3.3. 1950 年代後半の吉村の伝統論

1950 年代後半の吉村の伝統に関する言説について，表 3 の通り抽出した。『新建築』1955 年 1 月号で丹下論文（前掲）が発表され，1950 年代の伝統論争が活発化し，続く 2 月号の池辺論文（前掲）では，吉村の「ニューヨークに建つ書院造」が批判の対象となった。しかしながら，吉村がこれに対し，直接的な反論を行った記事は見られない。

以後，最初の吉村の言説が見られるのが，『新建築』1956 年 3 月号の「伝統をどう克服するか？シンポジウム：日本建築の進路」（報告者：丹下健三・池辺陽・横山不学・大高正人・吉村順三・コンラド＝ワックスマン／表 1–7）である。ここでは，多数の伝統に関する言説が見られた。その後，吉村の言説が見られるのは，1958 年 2 月に『新建築』発表した建築作

品「山の上に建つモーテル」説明文（表 1-8）である。それまで『新建築』では，作品を発表しても，文章による説明を付けなかったことを踏まえると珍しい例と言えるが，「伝統」に関連する言説は見られなかった。一方，翌月の『国際建築』でも同建築が発表され，その際には，説明文が付けられた。『国際建築』1958 年 3 月号では，4 件の建築作品が発表され，それぞれに説明文が付された。しかしながら，伝統に関する言説はほとんど見られなかった。

『新建築』1958 年 11 月号では，住宅に関するアイデアコンペの審査員を務めた際の対談記事が掲載された。1950 年代最後の言説は，「日本的な美しさとは」（1959.6／表 1-14）と題されたインタビュー記事であり，ここでも多くの伝統観が示された。

表 3　1950 年代後半に見られた吉村の伝統に関する言説

	引用文
引用文 6 （表 1–7）	日本の歴史の一つの特徴は，日本が非常に貧乏であつた①ことだろうと思うのです。（中略）それに合つたような生活①をしなければならないし，して来たと思うのであります。（「伝統をどう克服するか？」『新建築』1956.3）
引用文 7 （表 1–7）	いちばん私が強く感ずるところは，日本の建築は問題をできるだけ簡単に直接に捉えて処理して来た②。それから（中略）仮のすまい（…）というような言葉が表現するように，必ずしも永久に残るべきものという方向ではなかつた③ように思います。（同 1956.3）
引用文 8 （表 1–7）	もう一つは，今の日本に残つております建築を見ましても，それが余り一人の個人の王のためであるとか，支配者のためであるとか，そういうことでなしに，もつと何か大勢の人に共通する大きな広いところからでてきた④ような気がするのです。（同 1956.3）
引用文 9 （表 1–7）	それからもう一つ具体的にその結果としては，自分達が使います材料をできるだけ有効に使う⑤，それから建築そのものも小さい建築だつたと思うのです。その小さい建築を自分の壁の中だけでなしに場所全体が，その土地全部が住む者と一緒になるような，（中略）丹下さんがおつしやつたような自然に対抗するというより，それにうまく溶け合つてできるだけ利用しよう⑥という，考えれば非常に貧乏くさい考えかもしれませんけれども，その結果は私は非常に快適な一つのうまいやり方だつたと思うのです。（同 1956.3）
引用文 10 （表 1–7）	建物の美しさにしても（中略）なにかその決められた非常に簡単な木の柱，紙の襖，どこの家に行つても畳が敷いてありますけれども，そういうものの組合わせなんかで⑦何かその中に思いがけない小さな驚きとか，新しい感じとか何か面白いものを作つてきた⑦というそういう知恵もあつたと思うのです。（同 1956.3）
引用文 11 （表 1–7）	デザイン或いはクリエーションというものは，これは決して手品のように新しいものを作り出すものでなくて，一つの配置再編成だと思うのです。やはり昔のものの中からいいものを一杯集めてよく勉強してそういうものを再編成することが即ち創造⑦だと思う（後略）（同 1956.3）

引用文 12 （表 1-7）	私は日本で一番好きな建物はお寺や大きな家でなくて，本当は民家⑧なのであります。そしてそこに自然の問題も出て来るのですけれども，その当時民家を作つた人は本当に寒さからも，また嵐からも守れるために，その時に与えられた力一ぱいの材料で，力一ぱいのテクニックで，しかも特別上手な大工さんを頼んだわけでなくて，村の人達が集つてその民家を建てたのだと思います。そしてしかも出来たのはやはり世界の名建築と同じように，私を感動させるものがある⑧のです。（中略）私の伝統というのはそんなようなところに一番ウェイトを置いております。（同 1956.3）
引用文 13 （表 1-9）	自分はいつも建築のある風景に心をひかれる。京都の街を取り巻く山々，漁村を抱きかかえた様な海浜，アルプスの岩峰も小さな祠や，山小屋のあることによって，自分に親しく話しかけて来る様な気がする。自然を愛し，その中に溶け合って生活することが，本当の日本のよさ①ではないだろうか。日本の庭はその意味で建物の空間と自然の空間をつなぐユニークな役目を果している①。（「山のモーテル」『国際建築』1958.3）
引用文 14 （表 1-13）	薄暗い家の方が住みよいね。今度の応募を見ていると少し明る過ぎる家が多いようだ。このごろは人工照明が発達しているでしょう。だから家全体が薄暗くて，必要なときは明るくなるという方が傾向としてはいいのではないか①と思うな。それと奥行きのない家が多かったですね。これは反動ですよ。ヨーロッパやアメリカの家は全体に暗かったでしょう。それがだんだんと明るい家を造って，非常にヒーティングが発達して来たから，庭などに延長して楽しく住むようになってきたわけね。それをそのまま日本にあてはめると，木造住宅だったら，そういう概念は間違っているわけだ。（対談「「明日の小住宅」にもとめるもの」『新建築』1958.11）
引用文 15 （表 1-14）	根本的にいえば，単純さ（シンプリシテイ）①ということが一つの特長でしよう。それから機能の方からいえば融通性（フレクシビリテイ）②ということも特長といえますね。（対談「日本的な美しさとは」『婦人画報』1959.6）
引用文 16 （表 1-14）	日本のものを見るとプレーンですし，さきほどいつた融通性があるし ── 根本的にいえば非常に経済的③なんだろうと思いますね。日本のものは手間をかけないで，いろいろな結果を得るというものをもつているでしょう。考えて見れば，それも日本が貧乏だからいろいろな工夫があつたわけですね。貧乏ぐらしの知慧が長い歴史の中に生れてきたわけです。その何かものを処理していく上の，簡単さというのがいまのモダンな考えかたに通じる④ものがあるのですね。（同 1959.6）
引用文 17 （表 1-14）	われわれは今日の生活にぴつたりしたものをつくりながら，日本のよさを保つてゆく⑤，という仕事をしなくてはならないですね。（同 1959.6）

3.4. 1960 年代前半の吉村の伝統論

1960 年代前半の吉村の伝統に関する言説について，表 4 の通り抽出した。「誠実な建築」（1961.10／表 1-16）では伝統に関する言説は見られなかった。1965 年 7 月の「建築と設計 私はなぜ新宮殿の設計から手を引くか」では，前述の通り，吉村の伝統観が体系的に示され

ており，日本建築の特色として，「流動的な自由な空間」，「純粋さ」，「誠実さ」，「芸術性」の4点が指摘されている。

表4　1960年代前半に見られた吉村の伝統に関する言説

	引用文
引用文18 （表1–15）	何処の土地に行っても必ずその土地特有の性格があるもので，古い街にはそれらしい風格があり，風景のよい所にはその地形の生み出す風情があって，建築家としては，その土地によく調和してその土地の雰囲気から生れた様な建物①をデザインすべきことが大切だと思う。（「ホテルと旅館」『国立公園』1960）
引用文19 （表1–17）	形はなにも関係ないけれども，そういう空気がですね。外観なんかも，あまりドラマティックな形よりも，宝が池の，ああいう風景のところに，周囲の景色と対決するというよりも，それから生まれたような表現を選びました①。そこらも，日本の家の感じでしょうね。（「建築創造のるつぼ」『近代建築』1963.8）
引用文20 （表1–18）	新宮殿はもっとも近代的な建物としなければならない。それでできるだけ能率的で現代的な設備を用いること①を積極的に行った。 （「新宮殿の設計について」『新建築』1964.1）
引用文21 （表1–18）	庭園は今度の宮殿の設計にあたって非常に重要な部分②となっており，今までのスケールの小さな日本庭園の手法から一歩進んで，スケールの大きな現代の庭園を考えなくてはならない。そして建物との関係においてそれぞれ変化に富んだものでなくてはならない。たとえば前庭は石を敷きつめた庭であり，中庭は砂の庭，その他苔の庭，水草の庭，芝生，灌木の庭，それぞれの庭が周囲の広大な樹木と溶け合って大きな空間を与え，おのおのその特徴をもつことになろう。 （同1964.1）
引用文22 （表1–19）	日本建築の特色には，いろいろあるが，その第一の特色は，流動的な自由な空間①をもつということである。（中略）日本の建築では，ご承知のように，建物の内部と外部とは，一体のものとして考えられてきた②。ということは，室内と庭との間に自由な交流があることである。季節の移り変りは室内に反映して，そのときどきの気分が生れ，室内は室内で，自由な使い方によって，おどろくほど効果的なふんいきが生れる。そこに大らかな気分が生れ，西洋建築にみるような，堅い建物の中の生活ではなくなるのである。日本の民家が，高く評価されているのもこのことによろう。（「建築と設計　私はなぜ新宮殿の設計から手を引くか」『朝日ジャーナル』1965.7.11）
引用文23 （表1–19）	建物の純粋さ③とは何か。それは建築材料を正直につかって，構造に必要なものだけで構成するということである。柱は常に屋根をささえる役割をもち，障子の桟は，造形的なパターンであるとともに，しっかりした構造的な役割をもっている。これらの構成は，もっとも簡単で，しかも清楚な美しさを創り出していて，これが私は，純粋さということであると思う。（同1965.7.11）

引用文 24 （表 1–19）	また建物における誠実さ④ということは，（中略）建物の目的を忠実に解決する，ということだと思う。いいかえると，建築の造形を誇張しない④ことである。 （同 1965.7.11）
引用文 25 （表 1–19）	いたずらに文化財的な古典主義にもどるということでなく，先にもいったように，精神は，桂や二条城などに学ぶが，これを新しい材料，新しい機械設備で生かす⑤ということが，新宮殿の設計に当っては当然，必要であると考える。 （同 1965.7.11）
引用文 26 （表 1–19）	建物の外観を決定する重要なものとして，屋根の問題があるが，日本のように雨の多いところでは，やはり軒の出の深い，勾配屋根がぜひとも必要⑥である。屋根の形は，日本の建築の中で，いちばん美しいものの一つであるが，これも古い屋根をまねるのではなく，新しい技術で，美しい形を創るべき⑤であると思う。 （同 1965.7.11）

4. 結論

抽出した言説の分類結果を表 5 に示す。これに基づき，次の結論が得られた。

表 5　1950–1965 年の吉村著作にみる伝統論の分析

表1	年	月	種別	平面と構造の簡素・明快さ	素材の美の尊重	無装飾	左右非相称	環境との調和		規格の存在	「民衆」の視座への共感	「空間」による伝統の把握	「縄文的なもの」への関心	生活との均衡	雰囲気	簡単さ	仮設性	再編成としての創造	新しい技術でつくる	暗さ
				30–a	30–b	30–c	30–d	30–e		30–f	50–a	50–b	50–c	他1	他2	他3	他4	他5	他6	他7
1	1951	2	エ	①	②									③						
2	1952	2	エ											①						
3	1952	10	対																	
4	1954	1	作					①												
5	1954	1	作						①											
6	1954	11	対	①					④	②					③					
—	1955	1		丹下論文																
—	1955	2		池辺論文																
7	1956	3	対						⑥		④			①		②	③	⑦		
											⑧			⑤						
8	1958	2	作																	
9	1958	3	作						①											
10	1958	3	作																	
11	1958	3	作																	
12	1958	3	作																	
13	1958	11	対																	①
14	1959	6	対									②		③		①				
														⑤		④				
15	1960	2・3	エ						①											
16	1961	10	エ																	
17	1963	8	対						①											
	1963	12		森の中の家（軽井沢の山荘）																
18	1964	1							①										②	
19	1965	7	エ	③				⑥	②			①				④			⑤	

吉村の 1950 年から 1965 年の言説に見られる伝統観は，1950 年代の伝統論争が活発化する 1955 年より前とそれ以降に分けた場合，前者では 1930 年代の論争で形成された伝統理解に関連する内容が中心であり，後者では 1950 年代に新たに形成された伝統理解に近い内容が加わっており，藤岡の示す伝統論争の総括にほぼ沿った結果となった。一方，吉村独自の

伝統理解の仕方として，主に 3 つの内容が明らかになった。1 点目は，建築と「生活」の均衡を説くものであり，日本はもともと貧乏な国であり，その生活に合った建築のあり方を重視する言説が見られた。また 2 点目として，「簡単さ」ということが言われ，造形を誇張せず，問題を簡単に処理してきたことを特徴として挙げ，これがモダンさに繋がっているとした。3 点目は，建築の設計に際し，「伝統」をどう扱うかについてであり，現代的な設備・技術を用いることの重要性が主張された。

2 点目，3 点目が，50 年代後半以降に見られたのに対し，1 点目は対象期間を通じて見られた内容であった。その他，既往論考に見られた書院造か数寄屋造かという論点は，吉村の言説にはほとんど見られず，むしろ民家を好んでいたことが明らかとなった。

そうした中，本研究が対象とした資料において，最も多く語られたのが，建物と周囲の自然や庭との関係を重視する考え方であり，これは 1930 年代に既に形成されていた伝統理解の方向性ではあるものの，吉村の建築設計において重要な思想的背景となっていたものと考えられる。

吉村が，伝統的なものの中の好きなものとして「民家」を挙げたことは，その伝統論を理解する上で象徴的な事項と言える。このことを既往の伝統論争の総括に沿って理解しようとすれば，当時の社会主義美学の登場を背景とした民衆の視座への共感の一つの表れと捉えられてしまいそうであるが，本稿を通じて，吉村の言説を詳細に観察していくことにより，むしろ，生活との均衡や，問題を簡単に処理すること，さらに建築と周囲の自然との関係を重視するといった，総体として吉村に独自な伝統論が，同言説の要因となっていたことが明らかになったと言えよう。

註

1 羽藤広輔「1950 年代伝統論争における和風建築批判と反論 ── 吉田五十八の事例に着目して ──」『デザイン理論』68 号，意匠学会，2017 年 8 月，pp.35–48
2 丹下健三「現在日本において近代建築をいかに理解するか ── 伝統の創造のために」『新建築』1955 年 1 月号，新建築社，pp.15–18
3 池辺陽「「日本的デザイン」といかに取りくむか」『新建築』1955 年 2 月号，新建築社，pp.41–43
4 藤岡洋保「伝統論争の歴史」『建築 20 世紀 PART2』新建築社，1991，pp.78–79
5 『新建築』1954 年 12 月号 p.33 による。
6 芦原義信「ビルの谷間に咲きいでた花」『新建築』1954 年 12 月号，新建築社，p.32
7 註 3 参照
8 榎本英恵・八代克彦「吉村順三の住宅設計手法に関する考察 ── その 1：設計手法のキーワードの抽出および配置平面図の方位」日本建築学会北海道支部研究報告集 72，1999.3，pp.505–508，福原舞・河内浩志「吉村順三の記述における「環境」についての基礎的考察」学術講演梗概集

2015（建築歴史・意匠），日本建築学会，2015.9，pp.347–348 等が挙げられる。

9 藤岡洋保「ニューヨーク近代美術館の“Japanese Exhibition House”（松風荘）に示された伝統理解」学術講演梗概集 F–2，建築歴史・意匠 1997，日本建築学会，1997.7，pp.85–86

10 藤岡洋保「松風荘 ── 古建築の姿を借りた吉村順三の“現代建築”」『新建築』2004 年 11 月号，新建築社，pp.145–151

11 香山壽夫「吉村順三 ── 近代日本が生んだ独自の古典主義者」『JA』59 号，新建築社，2005，p.7

12 横山正「住宅の 50 年」『昭和住宅史　新建築 1976 年 11 月臨時増刊』新建築社，1976.11，pp.17–29

13 藤森照信「「なんともいえず素直」な素材感」『吉村順三を囲んで』TOTO 出版 1992.8，pp.123–133

14 田中禎彦「XI 近代主義の成熟と変容」『近代建築史』昭和堂，1998，pp.167–180

15 1930 年代に形成された伝統理解の特徴について，藤岡洋保「昭和初期の日本の建築界における「日本的なもの」：合理主義の建築家による新しい伝統理解」日本建築学会計画系論文報告集 412（0），1990，pp.173–180 に詳細な記述があり，「環境」は建物を囲む自然を意味することが分かる。

16 吉村はレーモンドの事務所で働いていた。

The Theory of Tradition in Junzo Yoshimura's Written Works from 1950 to 1965

HATO, Kosuke

This paper clarifies the development of Junzo Yoshimiura's theory of tradition from 1950 to 1965 by comprehensively examining his works (essays, interview articles, and descriptions of architectural works) written during the same period.

In this research, Yoshimura's unique ways of understanding tradition were analyzed in terms of the following three aspects.

1. Yoshimura argued for the balance between architecture and "life." Based on the fact that Japan was originally a poor country, he emphasized that architecture should be suited to such life.
2. Yoshimura referred to "simplicity." It was highlighted that the Japanese people did not exaggerate modeling and handled problems easily, which were related to modernity.
3. Yoshimura explained how to deal with "tradition" when designing architecture. He argued that it is important to adopt modern facilities and technology.

In addition, the argument in previous studies regarding whether it was Shoin style or Sukiya style was hardly observed in Yoshimura's discourse, and he rather liked folk dwellings.

Furthermore, the statement that is most frequently seen in this research material is the concept that emphasizes the relationship between buildings and their surrounding nature and gardens. This can be said to have been an important ideological background for Yoshimura's architectural design, even though it was a direction of traditional understanding that had already been formed in the 1930s.